第4節　あおぞら保育

1．あおぞら保育ができるまで

昭和45年春，旧西成市民館でわかくさ保育園を始めて以来，この地域にあって保育—就学前教育も含めて—は，わかくさ保育園式のもので十分なのかという疑問があった。福祉事務所で措置されない子どもたちのことが，気にかかる。つまり，父親は働き，母親は家にいる。形式的には，保育に欠けない子どもたちの存在である。そんな子どもたちを通勤の行き帰りに，また家庭訪問先で見かけるたびに，この子どもたちはこのままでいいのかという疑問を持った。たしかに，母親はいる。しかし，狭い部屋，遊び場がないところで，子どもたちは何をして一日を過ごすのか。あるいは，保育園の手続を知らないままにブラブラしている子どもたち。しかし，手続を始めると，もう定員で入所できない。子どもたちの話を聞いてみると，こんな状態の子どもたちが意外と多いのに驚く。ここでは，保育所に入っている子どもたちのほうが恵まれているとさえ思うことがしばし

ばある。

いわゆる保育をうけられない子に，せめても安心して遊べる場所と時間，子どもらしい遊びができるよう手伝えたらと考えるようになった。こんな職員の声や母体の石井記念愛染園の援助があって，特別保育と本格的に取り組むことになった。

まず目標を以下のように定めてみた。

1　放任されている幼児を集め，保育する。

2　集団の楽しさや規律を教え，就学準備をする。

3　子どもにかかわるいろいろな問題を発見し，その解決を援助する。

このような目標を達成するために，わたしたちは昭和46年5月から活動を始めた。まず，構想を愛染橋隣保館長に話し，地元の人たちの協力を得ること，また大阪市民生局と協議することを確認する。

8月には，市民生局保育課長，係長，係員を地域に案内し，わたしたちの考えている特別保育について理解を深めてもらい，市としてもできるだけ援助をしていただくことになる。

9月になると，民生局で特別保育（あおぞら保育）について話し合い，そして10月には，担当保母が決定する。

保母たちは，11月から，関係諸機関（市更生相談所，西成署防犯コーナー，あいりん小中学校，福祉事務所など）の係りの人やケースワーカーなどといっしょに，地域の実態について学習を始めるとともに，歩いてからだで子どもの様子を把握することに努めた。12月に入ると，実習にもとづいて子ども数や簡易宿泊所などのピンマップを作成する。さらに既成の資料から，子どもたちに関係する資料をまとめてみた。その結果，子どもたちは，東田町と東萩町に集中していることも明らかになった。（図1を参照のこと）

新しい年を迎えるとともに，計画をさらに具体化すべく，地域の民生委員に特別保育の主旨を説明し，協力かたを依頼した。民生委員には，保育に適する場所などもお願いしたが，保母たちも独自に前年の秋から熱心に探した。しかし，場所を確保することは非常に困難であった。

新しい年（昭和47年）は，またあいりん子ども研究会が発足した年でもある。それまで，特別保育の開設に側面から協力してきた福祉事務所，市児童相談所，あいりん小中学校の各現場担当者など，この地域で子どもの問題と取り組んでいる者が，相互に連絡をとるとともに，子どもたちに何かプラスになる働きがしたいと，連絡会兼学習会として子ども研究会は発足した。以来月に1～2回の例会をはじめ，種々な活動を始めた。一方，特別保育に対しては，2月になると，民生局に申請していた保母2人の人件費補助が認められた。

いよいよ特別保育もスタートといいたいが，場所未定ではどうにもならない。以前から保母たちがめぼしをつけていた，東萩町の職業安定所の庭を交渉する。失業対策の賃金を支払う日はにぎわうこの庭も，平常はひっそりしている。子どもたちの多い場所からも近い。しかし，結果は残念なことに，職業安定所長自らが断わりに来る。更生相談所の業務係長もたいへん骨を折ってくださったが，国の土地であるので職業安定所の職員も自由に利用できない。貸してあげたいのはヤマヤマだが……，という断わりであった。また，日赤奉仕団長さんたちもいろいろと場所を捜しては交渉されたが，実を結ばなかった。

ほかに場所がないという判断にもとづいて，下記のような要領で

昭和47年2月，特別保育すなわち<あおぞら保育>は出発した。

あおぞら保育概略

主　体	社会福祉法人石井記念愛染園わかくさ保育園
保育場所	西成区海道町　海道児童公園
担当保母	2人（現在，ボランティア4人が交替で来ている）
保育児童	3～5才　30人（現在，2～5才　38人）
保育時間	9：30～11：30（実際は，8：00から子どもが来る）

2．あおぞら保育の出発

とにかくあおぞら保育はスタートした。問題は山ほどある。開始1か月目の日誌は，そのことを雄弁に語ってくれる。

昭和47年3月22日（土）晴

準備：8時30分　新しい遊具が来たので荷物がたくさんになった。整理して自転車につみ込む。子どもたちが喜ぶだろう。

出発　保母Aは，公園に行って掃除を始める。保母Bは，アパートをまわって子どもを集める。アパートの前では，子どもたちが，母親と待っていた。

「ネーチャン，おそいなー」と言う子どもたちを見ると，とてもうれしくて，「休めないな」「ガンバラなくちゃあ」と思う。

D君とE子の姿が見えないが，他のメンバーが揃ったので出発した。子どもたちが道いっぱいにちらばり，あっちこっちと遊びながら歩くので注意しながら，やっとの思いでF荘についた。F荘の前でも母親と数人の子どもたちが待っていた。G君は留守，H君は風

邪で休みとのこと。I子はまだ寝ていると言う。起きたら来るようにと伝言して出発した。あおぞらがスタートして1か月だが，迎えに来て寝ている子は，ほんとに少なくなった。

公園着：公園には，もうJ子とK君が来て遊んでいた。保母Aがゴミと奮闘しているので急きょ手伝う。カーペットを敷くと，子どもたちは遊具箱から遊具を取り出して遊びだした。男の子の場合やはりブロックに人気があり，飛行機やロボットを作る。スコップ等の砂場道具も十分あるので，ひとり遊びがたっぷりできる。

付近に住んでいるらしい人が来て「ゴミを捨てるのはお前らやなあ」と言いがかりをつける。われわれのゴミではないと反論したが，聞きいれられない。一方的な文句を残して去っていった。とてもいやな気持ちだ。

L子が「おしっこ」と言ったので，便所へつれていく。便所は，きょうもたいへん汚れていて困った。便器を用意してきたほうがよいかもしれない。犬などの糞が落ちているので注意はしていたのだが，M子が衣服にベッタリつけてきた。準備してきた洋服に着替えさせる。

こっちでは，K君がおやつを見つけて食べようとしている。「ダメダ」と言って聞かせるが，絶対に聞こうとしない。根比べである。こちらも，絶対に負けられない。何度も何度も「ダメダ」と叱った。K君もわれわれにだいぶ慣れてきたので，何か話しかけると，目を見て笑うようになる。

おやつ：10時30分　　みんなで公園の隅の手洗い場へ行き，おやつにする。一列に並ばせ手を洗わせていると，N君が割り込んでく

る。「こら！順番に並べ。おれも最後でええわ」とO君が言った。O君は懸命に集団の規律を守ろうとしているのだ。見ていてうれしい。

遊んでから，紙芝居をする。気がつくと，子どもたちのまわりに労働者がかこいを作っている。いつものことながら，勇気がいる。

お帰り：11時30分　　出席ノートにシールをはり，帰る準備をする。靴をはき，輪になって「さよならの歌」をうたって，解散する。

11時50分　　親が迎えに来ないので送っていく。自宅までの道で，子どもたちはまとまりが悪い。早く，整列して歩けるようにしなければと思う。

あおぞら保育スタートの時は，子どもを集め，遊び，帰らせるだけでクタクタであった。わかくさ保育園がまだ仮園舎で，今宮中学校横の公園にあり，いちいちそこから道具などを運ばなければならなかった。雨が降ったら，それこそたいへんだった。昭和47年10月，わかくさ保育園の園舎が完成し，2階の乳児保育室が4月まであくので，そこをあおぞら保育に貸してもらった。

おかげで厳寒時に，寒風が吹きすさんでゴミの舞う公園を使わずに，暖かい保育室でまとまりのある保育ができ，4月までの半年間に，子どもたちは落着きを見せ，集中力もぐーんとよくなってきた。環境が子どもにとってどれだけたいせつなものであるかを，身をもって体験した。そのころの保育日誌を紹介しよう。

昭和48年1月22日（月）晴

登園：8時30分　　Kちゃんが母親につれられて登園。

自由遊び：9時　　きょうは今宮小学校が代休で休校のため，TちゃんもAちゃんもG君もSちゃんもみな，お兄ちゃんお姉ちゃんにつれられて登園。しばらく，オルガンをひいたり，おしゃべりしたりして，遊んでいく。

体操・行進：9時30分　　体操が終わってから回れ右して行進をする。クルリと後ろを向くことはできるが，回われ右とはいかない。

自由遊び：海道公園で遊ぶ。公園は以前より汚い。誰も掃除をしないので，あきビンやガラスの破片が数えきれないほどだ。子どもが転ぶと危険。

集合：10時　　保育園にもどり2階の保育室へ。

用便・整理遊び：10時10分

おやつ：10時20分

自由遊び：10時40分　　紙きり・ブロック遊び。

おかたづけ：11時　　A君が，ほうきできれいにはいてくれた。

絵本：11時10分　　「たろうのともだち」，A君はストーリーを覚えていて，次から次へと話をしてくれる。Mちゃん，H君は，ウロウロしたり，おしゃべりしたり。最後に，ちゃんと聞いている友だちに「やかましい！」と叱られた。

お帰り：11時30分　　M子ちゃんが，また12時になる。

子どもたちも1年近くの集団生活と室内での保育のために，ずいぶんと落着きが見られる。保育プログラムも変化に富んだものができてうれしく思う。4月からは，また元の海道公園でのあおぞら保育にもどったが，道をへだててわかくさ保育園があるので，何かと便利である。たとえば，朝早く来た子どもも保育園の子どもと同じように園舎内で遊ぶことができ，公園でひとりポツンと待たなくてもいいのだ。

昭和48年6月2日（土）

登園：8時30分　　いつもながら，A君，B子，C子，D君が登園し，わかくさ保育でトランポリン遊びをしている。7時50分ごろ，B子がつれだって来たそうだ。

掃除：さっそく公園の掃除にとりかかる。とても汚れている。

集合：9時15分　　子どもたちを集合させ，公園へつれていく。そのまま自由遊び。

体操：9時40分　　みんなで体操。Eがひとりウロウロしていたが，他の子どもたちは元気いっぱい体操をした。出席ノートに印を押す。

集団保育：10時　　「汽車ごっこ」と「絵本」のグループに分かれて遊ぶ。汽車ごっこは，ボランティアのFさんが指導してくださ

る。絵本グループは，G先生が指導する。H子は，とても真剣に聞いている。来年は学校だ。家でもこんなふんいきがあればなあと思う。

きょうはとても労働者が多い。その中のひとりが，ビンを投げつけたので，そのかけらが子どもたちの座っていたカーペットの上まで飛んできた。また他の労働者は，I子を抱きあげる。I子が泣くのになかなか放さない。これから夏になると労働者がふえる。悪意はないのだが，子どもが泣いたりするのを見ると，つい心配になる。

おやつ：10時50分　　大阪市更生相談所からいただいたヤクルトを飲む。

お帰り：11時30分　　J子の母親の仕事捜しのためにきょうからJ子を昼から保育園で預かってもらうことになった。給食を食べてとてもよく眠った。

K子の居残り：12時　　K子が50円持っているので聞いてみると昼食代だと言う。50円で何が食べられるのだろうか。L君も家庭のいざこざのため，母親が頭から血を流し迎えに来られない。保育園の給食を食べさせる。とても喜んで食べた。

12時40分　　K子とL君を送っていく。M子がはしからしいと，母親より聞く。

J子の母親：1時10分　　J子の母親の職を見つけるため，更生相談所内の婦人相談室を訪問する。紹介先の料理屋へ行ったが，日曜日も勤めてほしいとのこと。子どもが4人もいるので，それはとうていだめだろう。ふり出しにもどる。

この日誌が端的に語るように，子どもたちの日々の保育を保障し

ようとすれば，必ず親たちの生活にも目を向けなければならない。そして，あおぞら保育の保母たちには，それをさけて通ることができない。次に，保母たちが取り組んだ<親と子>の課題について記してみたい。

3．あおぞら保育の親と子

3月15日，あおぞら保育が始まって20日目，西成福祉事務所の児童担当のMさんからK君を紹介される。5才でおしめをしている。体重24.5kg，身長は113.1cm，からだだけ見ると，2年生の平均はある。こちらからいろいろ働きかけても，反応を示さない。10分ほどわかくさ保育園内で様子を見ていたが，目の焦点が合わず，あちこち歩き回り，金魚鉢の中に手をいれたりする。福祉事務所のMさんの説明は，K君も来年は小学校だが，K君のような子どもを対象にした就学前教育施設が西成区にはないので，あおぞら保育園で取り組んでほしいということであった。スタートしたばかりのあおぞら保育園には，それだけの力量はない。K君もひとりの子どもであるかぎり，保育をうける権利はある。母親が付き添うということをたより

に，いっしょに遊ぶことになった。

6月，集団保育の結果が目に見えはじめた。それまでなかなかはけなかった靴を，介助すれば自分ではけるようになった。音楽を流すと，さも楽しそうにピョンピョンと跳ぶ。家庭訪問すると，笑いながら近づいてくる。初めのころは，呼んでも知らん顔をしていたのに……他の子どもたちも，何かとK君をかばい，手助けするようになってきた。

7月，母親がK君の施設入所を希望するようになった。K君はからだが大きく力が強く，少しでも目をはなすとどこかへ行ってしまうので病弱な両親にとって，K君の世話は重労働である。そのためKの兄が，学校を休んでK君を世話することがたびたびある。また，住居がベニヤ板1枚で隣と区切られているため，K君がさわぐと近所から苦情が出るなどが主たる理由である。B学園へ試験通園したが，排泄の自立ができていないということで断わられた。保育所，家庭児童相談員が協力して，＜オマル＞で時間を決めて座れるよう母親に指導する。しばらくして訪問すると，K君が便器で排便できるようになったとのうれしい報告を母親から聞く。

11月，児童相談所や福祉事務所からK君の母親に対して「K君のこれからについては，あおぞら保育でのK君の様子を見てから考えます」と言うだけで，なかなか来られない。こちらから連絡しても，解決にならない返事ばかりである。専門的な所で保育したら，もっと伸びるのではないかと悩む。

3月，とうとうあおぞら保育園の卒園児として修了証をわたす。初めのころから見れば，ずいぶん伸びたと思う。現在は，校区の養

護学級に通っているが，いろいろな問題が解決したわけでもない。

K君の問題も，どんなに努力しても，保母と親で解決できる問題ではない。障害児保育施設の充実ということが，何にもまして先決条件であるが，それが保母や親の努力にまかされているのが今日の実情である。ひとりの子どもの保育と取り組むとき，そこでは社会がかかえている矛盾と真正面からぶつからざるをえない。次の母親の事件でも，その例外ではない。

Jちゃんは，日払いアパートQに父母姉弟6人と暮らしている，あおぞら保育の子である。お父ちゃんはからだが弱く，お母ちゃんも病気がちなので生活保護家庭である。

昭和47年3月，あおぞら保育を始めて間もないころ，アパートQに子どもたちを迎えに行った時，Jちゃんを見つける。母親に「姉ちゃん，姉ちゃん，うちの子も頼む」と声をかけられたのが最初である。見るからにほったらかしという感じである。顔，手足は真黒け。はだしでアパートのまわりを走り回っている。2才だったJちゃんも弟もまだオシメをしているところを見ると，排泄も十分できないのではないか。3才の姉は，われわれ保母をじっと見つめて，いたずらっぽく笑った。Jちゃんはオシメが取れてからという約束で，姉だけ入園することになる。入園申込み書を書いてもらうことになって，母親が，字を書くことも読むこともできないことに気づく。「学校，全然行ってへんからなあ」と人なつっこく話す母親には，たよりなさを感じる反面，にくめない何かを感じる。

9月，やっとオシメが取れたJちゃんが入園する。まだ排泄が十

分に自立できないので，パンツをときどきぬらす。オシッコでもないのに「オシッコ，オシッコ」と言って，裸になり公園の外へ走り出すこともある。つかまえてジッとさせるのに一苦労する。しばらくは，「Jちゃん……。Jちゃん……」の毎日が続いた。家庭訪問で父親に会った。気のやさしそうなしっかりした感じの人である。「子どもたちのことをよろしく」とのことであった。

親子遠足，家庭訪問。だんだん父母とも親しくなり，母親は「姉ちゃん，姉ちゃん……」と，われわれ保母を何かと頼りにするようになる。自分の生まれた家のこと，両親や兄弟のことも話してくれるようになった。

昭和48年4月，4才になった姉と2才の弟は保育園に入園できたが，Jちゃんはできず，そのままあおぞら保育に残ることになった。このごろでは，姉は元気になり，Jちゃんもよくしゃべる子になった。

5月23日，昼すぎのことである。Jちゃんがなにやら元気がない。聞いてみると朝から何も食べていないと言う。アパートを尋ねる。母親は，「姉ちゃん，腹へって動かれへん」と寝ころがっていた。事情を聞いて驚いた。保護費を使いはたし，前日より食事らしい食事はとっていない。

「姉ちゃんに頼もうかと思てんけど，忙しそうやったし，あおぞらに来ている奥さんに千円借りてきてん」。話をよく聞くとDのお母ちゃんに二度ほど借りたことがあるらしい。他にも父親のほうに数十万円の高利の借金があり，その返済に保護費そっくり消えていくと言う。毎日の生活費は，また借金してあてるというくり返し。

「姉ちゃん，姉ちゃん，お父さんに言うてえな。金もないのにパチンコするし，毎日酒のんでゴロゴロしてんねん。この前も月賦でミシンこうて，すぐ売ってしまいよってん。そのお金も払わならんし，かなわんわ」と言う。

母親の話は，信用できる。父親に会うため，次の朝訪問する。われわれが，母親以上にある信頼を持っていた父親とは，別人のような感じであった。フトンの中から「スミマセン。格好悪い話ですわ」と半分寝ているような顔で話し出す。しかし，どうも格好を気にしているので話にならず，引きあげる。母親には，「せっかく借りたお金やから，買い食いなんかせんと，お米を買ってご飯たいて，大事に使いや」と話して帰る。

次の朝，「お金，だいじょうぶか」と聞いた。母親の様子がおかしい。「ゆうべ，働いてん」と言う。2，3年前までやむを得ずしていた売春を，また始めたのだ。しかも，父親がそれをさせていると言う。われわれの父親に対する信頼は，ゼロになる。とにかく早急に手を打たなければと思い，関係機関に協力を求めて走り回る。まず生活費を節約して，借金を少しでも少なくしていかなければならない。これ以上借金を多くしないために，福祉事務所に「借金の一時立替えはできないか」と尋ねたが，ダメ。毎月2万円以上もかかる住居費を節約するために，地域内の「更生家族寮」への入寮を頼みに行ったが，生活保護家庭では入寮できないと言う。父親にはいろいろ問題があるが，子どもや母親はどうにかしてやらなければと思う。どの機関にお願いしても，このケースはどうすることもできないと言われ，八方ふさがりである。

まずわれわれの手でできることからということになり，特別な理由なのでＪちゃんの保育所入所手続をとり，急きょわかくさ保育園に入園させた。そして母親の売春を防ぐためにも安定した職場を捜し，就職させることに力を入れる。と言っても，母親は字が読めない，書けないというハンディキャップがあり，職業は限定される。あちこち捜し回ったが見つからない。「姉ちゃん，あかんな」とがっかりする母親をはげましながら，婦人相談所からの紹介で職場が見つかる。

現在，市営住宅入居を待ちながら一生懸命働いている。まだまだ数多くの問題は残っているが，母親の安定した収入で一応子どもたちは，うえから助かり，元気に保育園に通っている。

Ｊちゃんの母親の場合は，まさに子どもの保育の保障が，母親の生活の保障と表裏をなすことを物語っている。そしてこのケースも，保母の個人的な努力ではどうにもならないところまで来ていると言えよう。Ｊちゃんの安定した生活もいつまで続くか，保障のかぎりではないのである。

4．あおぞら保育ができて

あおぞら保育が始まって以来，今年８月までに保育した延べ保育人数は，4,562人。一日平均16人である。入所児は76人で，地区別に見ると，東萩町の子どもたちが51人と全体の67％にあたる。保育場所の関係で，子どもたちの多い山王町や東田町の子どもたちは来ていない。集まってきた子どもたちの年は，２才２人，３才11人，４才14人，５才５人と，３才児４才児が中心である。またこの間に退

所していった子どもたちの合計は，44人である。理由を見るとわかくさ保育園へ入園できたものが14人で32％，その次は引越しの11人（25％）であり，あとは不就学児であることがわかり，小学校へ入学したものが４人，卒園したもの４人，幼稚園へ行ったものが３人，また家庭の事情で児童相談所に保護されたものが２人，などをあげることができる。このような実情を見るだけでも，この地域におけるあおぞら保育の重要さは理解されよう。

これらの実績とは別に，あおぞら保育をすることによって，子どもたちがいかに変化してきたか記してみたい。

最初は，保母が巡回していかなければ集まらなかった子どもたちも，いまでは自主的に来るようになった。８時にわかくさ保育園の門が開くと同時に，２人の子どもたちが飛び込んで来る。８時30分には10数人の顔が見られるのは，始めた当時には想像もできなかったことである。買食いをしなくなったのも大きな変化である。最初は保育中であれ，わらび餅の太鼓がなると買いに走る。ワイワイ，

ガヤガヤということで，もう保育どころではなかった。いまは，そんな音には耳もかさない。保母たちも驚くと同時に，保育の力，集団の力の

すばらしさを子どもたちから教えられている。集団の力は，団体行動のとき端的に見られる。たとえば，ダンゴのような行列しかできなかった子どもたちも，近ごろは並んでスイスイと歩いていく。そんななかで保母の欲目かもしれないが，子どもたちもこざっぱりしたものを着てくるようになったと思われる。いわゆる高い服ではなく，洗濯のゆきとどいた服，手入れされた服ということだ。また生活のこまごましたことにも，子どもたち自身が気づくようになった。一例をあげれば，ゴミをゴミ箱に捨てるようになったことである。またいちばんの変化は，「姉ちゃん——」が「センセイ」に変わったことでもある。保母たちは「姉ちゃん」でも困ることはないが，子どもたちが「センセイ」と言うなかには「あおぞら」を保育の場と自覚したところから生まれてきたのではないか。子どもたちの会話の内容も変わってきた。「あの2人は好き同志」とか「姉ちゃん（保母）は，おっちゃんに逃げられたのとちがうか」といったたぐいの話が，いつの間にか姿を消し，遊びに熱中するようになってきた。それは，「保母と子ども」という関係から，「子どもと子ども」との関係が集団の中で育ったことの証拠である。

親たちにも変化は見られる。あおぞら保育に対して積極的にかかわりだした。カバンを買おう。エプロンを買おう。つまり無料貸与から，自分たちで買い，子どもたちに持たせるまでになった。と同時に，親たちの自主的な会「こどもの会」ができ，出せる人は月200円の会費を集め，絵本を買ったり，入院中の子どもを見舞ったり，親子遠足の資金にしたりしている。

「姉ちゃん，うちの子も頼むわあ」と言っていた母親たちの子どもへの関心が，徐々ではあるが，あおぞら保育をとおして育っていることはうれしい。

最後にここ1年半の保育で感じたこと，というよりにむしろ願いといったものを書いて終わりたい。

われわれは，あおぞら保育を始める場所の最低の条件として，次の点を考えた。

①便所，水道がある。②安全であること。③屋根または木陰がある。④適当な空間がある。⑤家からあまり遠くない。

などの点であったが，海道公園がこれらを満たしているから選んだわけではない。他に場所がないから，出発したのである。たとえば，海道公園の場合，太鼓橋やスベリ台の遊具や砂場はあるが，砂場は吐物やビンの破片で使えないし，地面には紙くずなどのゴミからふとんなどまで散っている。とても保育の場ではない。毎朝，掃除するごとに，きれいな場で保育がしたいとつくづく思う。公園での保育は，それこそ開かれた保育所ではあるが，それだけに障害も多い。

さらに希望をいえば，あおぞら専用の保育室と相談室がほしいということである。母親が相談に来ても，話す場所がないた

め立ち話で済ませたり，物置きの隅に腰かけて話すこともしばしばある。もっと欲をいえば，この子どもたちを中心にすえた，子どもセンターがほしい。保育園や保母がいくら努力しても解決しない問題は，日々の保育の中に山積している。とにかく親と子の問題を同時に考え，解決してくれる<場>センターがどうしても必要なのである。そしてそこで働く専任の指導員がほしいことはいうまでもない。

第2部　子どもの遊び調査報告